

平成21年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 イカナゴ

学名 *Ammodytes personatus*

系群名 伊勢・三河湾系群

担当水研 中央水産研究所



生物学的特性

寿命: 2〜3歳

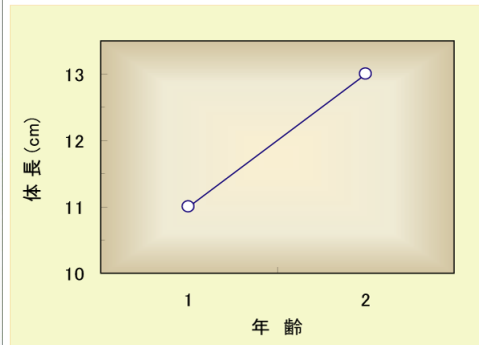
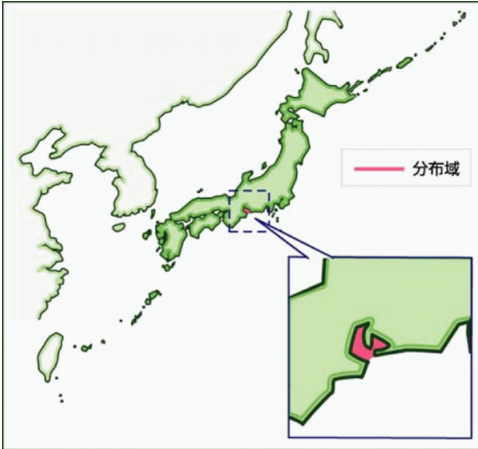
成熟開始年齢: 0歳

産卵期・産卵場: 12〜1月、伊勢湾口域〜渥美外海の粗砂域

索餌期・索餌場: 夏眠時期(7〜12月)には、ほとんど索餌をしない

食性: 動物プランクトン(カイアシ類が主であるが、ヨコエビ類、ヤムシ類、アミ類も食物となっている)

捕食者: 仔稚魚期には多様な浮魚類やヤムシ類、未成魚および成魚期にはヒラメ等多くの底魚

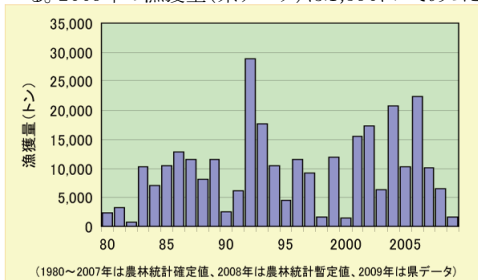


漁業の特徴

漁獲対象は、2〜3月が仔稚魚、4〜5月が未成魚、1〜2月が夏眠後の産卵を終えた親魚である。仔稚魚と未成魚は船びき網で漁獲され、親魚はすくい網で漁獲されている。ただし、仔稚魚が漁獲量のほとんどを占める。

漁獲の動向

1974年に27,000トン台であった年間漁獲量はその後大きく減少し、1982年にはわずか699トンにまで落ち込んだ。1983年以降は再び増加したが、その後は1,507(2000年)〜28,777トン(1992年)の間で大きな変動を繰り返している。2009年の漁獲量(県データ)は1,590トンであった。



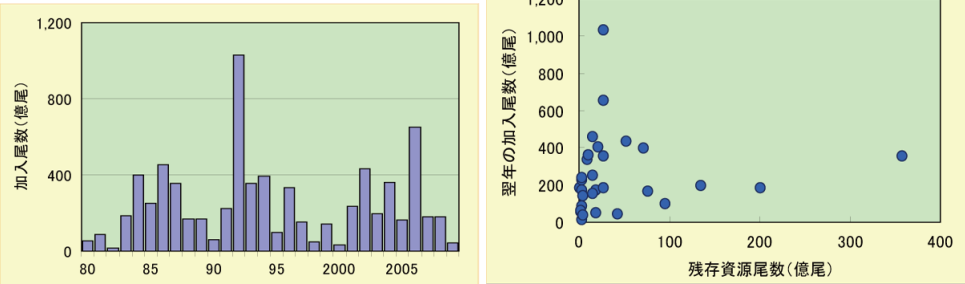
資源評価法

各県で算出された日別漁獲尾数を加算して伊勢・三河湾の漁獲尾数を求めた。これらのデータから算出した各操業日の漁獲尾数および出漁統計データをTaylor's power lawによるDeluryの一般化モデルに当てはめ、漁獲加入資源尾数と残存資源尾数を推定した。上記の方法で推定された残存資源尾数と翌年の加入資源尾数を用いて再生産関係を検討した。

資源状態

2009年の漁獲量が1,590トン(県データ)で過去20年間の19番目であり、推定初期資源尾数も44億尾で過去20年間の19番目であったことから低位と判断した。再生産成功率(残存親魚尾数に対する翌年の初期資源尾数)は、短期的に大きく変動するパターンが継続していたが、2006年以降3年連続して極めて低い状態であり、動向については減少傾向と判断した。





管理方策

伊勢湾のイカナゴ資源管理では、加入乱獲抑制を主体として、成長乱獲抑制を部分的に導入している。成長管理においては、事前調査によって把握されるその年の成長状況に応じて解禁日を前後に調整するなど、細かい管理を実践している。加入管理においては、親魚量一定方策を用いており、産卵期の禁漁に加え、親魚量確保のための終漁期の設定を行っている。今後は、再生産成功率を変動させる環境要因や親仔関係について解析をすすめつつ、加入量を高位安定させるために必要な産卵親魚の量と質を検討する必要があると考えられる。

資源評価のまとめ

- 近年3年の年間漁獲量は、過去20年間の平均(10,833トン)を下回っている
- 近年3年の加入尾数は、過去20年間の平均(266億尾)を下回っている
- 再生産成功率は、短期的に大きく変動するパターンが継続していたが、2006年以降3年連続して極めて低い状態である

管理方策のまとめ

- 従来どおり、事前調査によって漁獲開始日を設定し、Deluryの方法によって漁獲終了日を決定する
- 再生産関係をさらに吟味し、残すべき親魚尾数を算定する
- 産卵親魚の年齢組成や肥満度を考慮した親魚の取り残し方策を検討する

資源評価は毎年更新されます。